

# 聴覚障がいを持つ学生に対する英語授業支援の取り組み

田頭 未希\* 木下 綾\*

\* 東海大学 外国語教育センター

PC テイカー： 小林愛(東海大学体育学部4年) 池野弘恵(東海大学体育学部3年)

## 東海大学で学ぶ聴覚障がいを持つ学生

表1 聴覚障がいを持つ学生数

年度	2005	2008	2013
人数	21	12	16

表2 授業中の支援 (2012年度アンケート結果の一部)

学年 性別	英語		英語以外の科目	
	現状	希望	現状	希望
1年 男 A	無	PC テイク	手話通訳、PC テイク、プリント	手話通訳
1年 男 B	無	手話通訳	PC テイク、プリント、PowerPoint	手話通訳
1年 男 C	プリント、PowerPoint	プリント	プリント、PowerPoint	プリント
1年 女 E	無	プリント	PC テイク	PC テイク
3年 男 H	無	プリント	ノートテイク	PC テイク

## テイカー配置の取り組み

- ▶ 聴覚障がいを持つ学生にテイカー(PC テイカー、ノートテイカー)をつける取り組み(2013 年度から)
- ▶ 外部団体に学生テイカーの育成、テイカーの配置、テイクに必要な PC の管理、その他様々なコーディネートを委託
  - ▶ 2013 年度春学期は湘南校舎で 9 名の学生を、学生テイカーと外部団体のテイカー、合わせて約 60 名で、62 コマ/週の授業をサポート
  - ▶ 学生テイカーの大多数は学部学科で募集したボランティア(学部学生や大学院生)
  - ▶ 数時間のテイクの講習を受け、実際の授業でのサポートを開始
  - ▶ 1名の学生に対し、基本的に 2名のテイカーを配置
  - ▶ 講習では主に PC テイクを学ぶが、英語科目では英語と日本語の両方を書き取ることが求められるため、手書きのノートテイクを行うことが多い
- ▶ 英語科目
  - 春学期 ノートテイカー配置(2名)
  - 秋学期 テイカー配置(0名)

## 実践例

### ①「基礎英語演習」週2コマ・2単位科目 履修生 16名(聴覚障がいを持つ学生2名)

リーディング・文法  
ホワイトボードへのリーディング本文の投影と書き込み  
授業支援システム(ネット上ディスカッション・投稿サイト)を活用した訳文の投稿と共有

会話  
会話練習ペアワーク参加  
ライティング活動および ASL の基礎練習で代替

発表  
各学生3分程度の発表課題  
発表者は原稿をプリントして字幕の代替として配布  
聴覚障がいを持つ学生は発話と文字提示(PowerPoint)を同時に行う  
最初に発話と文字提示あるいは文字提示のみを行い、同じ内容を日本手話あるいは ASL でも行う  
必ずビジュアル資料(写真や地図など)を活用  
発表者は顔を上げ、大きい声ではっきりと口を使って話すよう促す  
Q&A は、学生全員が板書でやりとり

### ②「基礎英語演習」週2コマ・2単位科目 履修生 11名(聴覚障がいを持つ学生2名)

文法  
毎回 PowerPoint を使用し、授業後に同じものをプリントにして聴覚障がいを持つ学生にのみ配布

リーディング  
事前に資料(成句や文法事項のキーワードをテキストに出てくる順に箇条書き)を配布  
日本語訳は授業参加者全員が1文ずつ行い、教師は文法事項などを解説しながら、隣で解説事項や日本語訳の PC テイクも行う

## 学生へのアンケート調査

2013 年度秋学期に実施  
アンケート実施 4クラス 合計63名  
うち、2クラスは聴覚障がいを持つ学生も一緒に学ぶ  
合計24名\*(聴覚障がいを持つ学生3名を含む)

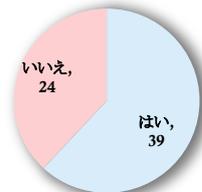


図1 学内に聴覚障がいを持つ学生がいることを知っていたか?



図2 一緒に授業を受けたことがあるか?

表3 コミュニケーション手段\*

	手話	筆談 (板書を含む)	口話	身振り	空書き
授業中に教師がとる方法として最適だと思うもの	3	2	6	3	0
授業中に学生同士がとる方法として最適だと思うもの	0	13	7	3	1
授業外で学生同士がとる方法として最適だと思うもの	4	5	8	4	2

表4 授業中のペアワーク、グループワーク、プレゼンテーションで学生同士がお互いに注意したこと(重複あり)\*

コミュニケーション手段	手話	紙面で文字情報を使う	口を大きく動かす・はっきりしゃべる	身振り	空書き
人数	0	4	15	7	0

表5 最適だと考える英語の授業形態\*

授業形態	人数
画像投影(PowerPoint などを使用)	12
補助プリント配布	2
板書をたくさん行う	4
教師が話しながら手話も使う	2

聴覚障がいを持つ学生の授業に関するコメント  
聴者と英語で会話するのはとても新鮮だった  
パワーポイントのレジュメを後でくれるのが助かった  
ASL に触れる機会になった

## 今後の課題

- ▶ 技術面の検討  
タブレット端末、音声入力・出力システム、電子黒板などの活用方法
- ▶ 授業内容の可視化  
例えば、色やカタカナの利用
- ▶ 個別対応の必要性

## 参考文献

- 木下綾 田頭未希(2012)「大学における難聴学生とろう学生への英語授業支援に関する一考察」『東海大学教育研究所 研究資料集』第20号, 63-78. 東海大学教育研究所  
田頭未希 木下綾(2013)「英語の授業支援の検討 -聴覚障がいを持つ学生のサポートに関するアンケート調査の報告-」『東海大学外国語教育センター所報』第33号, 43-49. 東海大学外国語教育センター